

重層的な支援体制の整備・強化による不登校対策について（これまでにいただいた意見）

重層的な支援	委員の主な意見	特に重要と思われる視点
<p>①魅力ある学校づくり 全ての児童生徒への対応</p> <p>不登校を生じさせない学級・学校づくり</p>	<p>○ 子どもたちが未来を生き抜いていく力を身につけるように働きかけることが大切。</p> <p>○ 「COCOLOプラン」では多様な学びの場の確保、1人1端末等を活用した早期発見、早期支援の実施、学校風土の見える化を通じ、皆が安心して学べる場所にすることが述べられている。</p> <p>○ 子どもたちの状況が多様化するとともに、社会・保護者・家庭も多様化する中で、子どもたちにとって社会で自己実現するために必要な教育が提供されることが大切。</p> <p>○ 教育提供の中心的な役割を果たしている学校が、すべての子どもにとっての居場所としての機能をどう果たせるか。子どもたち全員が安心できる場としての学校の構築、学校の在り方の確保はどんな形となるか。</p> <p>○ 不登校防止につながる魅力ある学校づくり、分かる授業、誰一人取り残さない学習環境を作っていく。その基盤の上に児童生徒がSOSを出せる環境を作り、周りの大人（先生・親・地域の方）がそのSOSを受け止める力を高めていく。そうした取組を通じて、すべての児童生徒を対象に不登校という課題に対する未然防止を行っていく。</p> <p>そのうえで、不登校の予兆にできるだけ早く気づき、即応的に手を打つ課題早期発見対応を行う。この時に大事なことは、アセスメントに基づき、多様な職種の人に関わり進路支援をしていくことである。これを実効的なものにするには、大人自身がつながれる機会を意識的に作ることが大切である。</p> <p>○ どのような学校だったら行きたくなるのか、子どもたちはどのような学校を求めているのか、子どもの声を聞くことが必要。</p> <p>R6年9月1日～10月31日：誰もが学びやすく居心地のいい学校づくりに向けたアンケートの実施</p>	<p>○魅力ある学校づくりを進めるために「誰もが学びやすく居心地のいい学校づくりに向けたアンケート」の結果を踏まえ、児童生徒や保護者の思いを反映させながら誰にとっても分かりやすい授業づくりや子どもの声をいかした学校づくりを行っていくこと。</p>
<p>②早期発見・早期支援 兆しが見えた児童生徒への対応</p> <p>専門職との協議によるチーム学校支援</p> <p>校内サポートルームの充実</p>	<p>○ 不登校児童生徒支援で一番必要なことは、信頼関係を構築するための適切なアセスメントとコミュニケーションに他ならない。積極的不登校（学校に行きたくないから行かない）と消極的不登校（行きたいけれども行けない）を見分け、見極めることが教員には求められている。</p> <p>○ 学校側は（多様な子どもたちの）受け入れ体制をどう整えるか、その支援の在り方、教育行政の支援の在り方、保護者・地域住民、専門職の関わり方をどうするか。</p> <p>○ 全ての子どもが安心して学べる学校環境を作っていく一方で、社会の中で自立して生きることが難しくなり、引きこもりになるというようなことがないように、アウトリーチの拡充、社会に開かれたチーム学校で子どもを支援していくことが大切。</p> <p>○ 学校にいる段階から地域ぐるみで子どもたちの支援をしていくことで、切れ目のない支援が可能になるのではないか。</p> <p>○ 校内サポートルームでは、個別に支援できる教室とオープンスペースがあり、校内サポートルームの時間割に基づき、授業に参加できるよう教員も対応している。教室には入れないけど校内サポートルームだったら行けるという雰囲気作りを学校全体で実施している。</p> <p>○ 学校の中に支持的な安心できる風土がどれだけあるかが大切になるが、学校がどれだけ不登校児童生徒支援で踏ん張れるかの鍵になるのが校内のサポートルーム。校内の支援教室をどう作り、人をどう配置するか、どんな環境にし、どんな取組をするか、人・もの・ことを充実させることが大切。そこは不登校の子どものみならず、少し疲れた子どもがエネルギーを充電できるような、また何でもない子どもも入れる、開かれたサポートルームづくりを進めることができれば。サポートルームを、不登校の児童生徒と限らず多様な子どもが学ぶ場として認識されるようにすることも大事ではないか。</p> <p>○ まだ学校には行けるものの、少ししんどくなっている子どもに対し、どんな支援が必要かを考えたとき、校内サポートルームの整備やサポートルームが開かれた場所となるよう柔軟な体制整備等が必要。</p> <p>○ 校内サポートルームや学校外の学びで進められているよいところを学校に還元していくことが大切。</p>	<p>○学校内外の多職種によるチーム支援の在り方やアセスメントに基づいた支援計画など具体的な取組の例を示していくこと。</p> <p>○全教職員の役割の明確化、ICTを活用した学習支援の様子、環境整備など、運営の在り方のモデル例を成果として広げていくこと。</p>
<p>③多様な教育機会の確保 学校に通いつらい児童生徒への対応</p> <p>高知県心の教育センターの支援</p>	<p>○ 心の教育センターが教育支援センターや各地教委の支援センターとつながることも必要。</p> <p>○ 心の教育センターと、民間施設を含む不登校に関する関係機関の一覧を、ホームページなどで提示すると、必要とする保護者が効果的に活用できるようになるのではないか。</p> <p>○ 高知県の不登校施策の強みは市町村に教育支援センターが多い点ではないか。そこで、心の教育センターのポジショニングを考えると県内全体を見渡す司令塔としての役割が考えられる。ただ、心の教育センターのホームページからは何をやっているかが分かりづらい。不登校の保護者等、ネットで調べる方が多いため、分かりやすいホームページが望まれる。</p> <p>○ 心の教育センターが独立した中核的組織となり、地教委が持っているセンターも含めたハブ機能を持った中核施設（人・物・情報が集約）になる必要があるのではないか。</p> <p>○ 中核となる施設には、人材育成機能（対教師支援機能含む）及び、データベースとして情報の収集、集約、分析、提供の機能も求められる。そして、データに基づく研究機能も必要。</p> <p>○ 学校に通うことができている子どもへの対応や家庭状況が厳しい子どもへの支援について、何とかオンラインサポートができないか。学力支援もできるプログラムがあると、登録した子どもがステップアップしていけるような学習支援ができるのではないか。</p> <p>○ 機能拡張にはオンラインサポート機能も求められる。事業実施に際しても、対学校・対教師・対自治体・対保護者・対子どものオンラインでの事業をやっていく。そのためには、コンテンツ開発や研修資源の開発が不可欠。さらに、オンラインの接続支援も事業として立ち上げる必要が生じる規模のものになるだろう。</p> <p>R6.4～：オンラインサポートの実施</p> <p>○ カウンセリングも対面のみならず、オンラインも導入していただくとありがたい。また、校内支援会へのサポート事業もオンラインの可能性があるのでないか。さらに、若者サポートステーションで高校生の処遇に困っており、そのサポートを明確にしてはどうか。</p> <p>○ 直接的な支援（子ども、保護者、先生方へのカウンセリングや福祉に関する生活支援等）と間接的な支援の両面から充実させることが求められるのではないか。</p> <p>○ 現在心の教育センターは時代の要請もあり、教育相談に重点が置かれ、相談体制が充実していると感じる。また、子どもたちの居場所や保護者支援としての役割も果たしているが、以前「近くないから来られる」と述べた保護者の方もいる。オンライン活用も含め、色々な形が考えられ、その点が充実するとよいのではないか。</p> <p>R6.9.6～：県立大との連携による Kochi Teens Base の運営</p>	<p>○心の教育センターが中核となり関係機関相互の連携を図ること。</p> <p>○オンラインなども活用し、相談支援体制を強化すること。</p> <p>○中高生の居場所をサポートするなど多様な教育機会を確保していくことが必要。</p>

重層的な支援	委員の主な意見	特に重要と思われる視点
教育支援センターの支援	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>実際に学校に通っていない、通いづらい子どもたちは本人がとにかく悩んでいるが、その横で支えている保護者にとっても、どれだけの苦痛があるか計り知れない。</u>そんな心配で愛おしい子どもが前に一歩進むことができたとき、保護者はどれほど喜びを感じたことか。 ○ 今後期待したいのは、<u>子どもたちを受け入れる居場所づくりを多く増やしていく</u>ということ。 ○ 教育支援センターでは、人との関わりに不安を持っている子どももおり、人と関わる経験を積んでいけるようにと考えている。さらに、<u>学習についても苦手意識を持つ子が多く、その子に合った課題を見つけ、タブレット等の活用を含め学習に対する意欲を持たせる</u>よう取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教育支援センターの数を増やしていくことやICT活用など児童生徒のニーズに応じた支援の提供。 ○学校をはじめ、保護者と情報共有を図り適切な支援を行うこと。
③多様な教育機会の確保 フリースクール等、民間団体の多様な場における支援	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>もっとしんどくなっている子どもたちに対して、将来的な社会自立に向け、学校以外の場でどのような教育機会の提供があると社会として支えられるか。</u> ○ 学校という場に戻るのには難しいという子どもたちに、この多様化している社会の中で継続的に学校以外の場での教育提供、教育機会の保障をどのくらいできるのか。その時のつなぎ方はどういう形なのか。 ○ 子どもたちにとっての教育提供の在り方が議論され、それぞれの場面で柔軟な支援、豊富な支援、あるいは支援の場が形成されていくことを考えねばならない。 ○ <u>アクセスの窓口を一本化したうえで、しっかりとアクセスできたかも確認する仕組みが必要。</u> ○ 連携のコーディネートをする役割が重要になる。 ○ 対象とする子どもたちのそれぞれの状況をしっかりと提示することが重要。 ○ <u>それぞれの場で行われている支援の情報整理が必要。</u> ○ <u>それぞれの子どもたちの居場所がどのような役割を担ってどのような力をつけたいと思って活動をしているかをお互いが知っておくことが大切。</u> ○ 教員を目指す学生や地域の自然、人材の活用も必要。 ○ <u>学校外の民間施設等は、子どもの成長、出席だけではなく、活動内容や成長を積極的に学校に伝えるなど連携を深めることが重要。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ○教育委員会・学校と民間の団体等が連携し、しっかりとアクセスできるようにしていくこと。 ○公民館や図書館等公共施設も多様な教育機会として活用できることを関係機関に周知すること。 ○学校外の施設における出席扱い及び学習評価についての要件などを周知すること。
学校に通いづらい児童生徒への対応 学びの多様な学校の在り方	<ul style="list-style-type: none"> ○ <u>教育支援センターや校内サポートルーム等、多様な教育機会の場の役割と異なる位置づけを明確にすることで、対象とする児童生徒が明確になっていく。</u>そこでキーワードとなるのが「学校」。学校として捉えたときに、<u>学力の保障は大前提。</u>その上で、<u>周囲の仲間と協働しながら成長し社会性を身につけていくことが必要。</u> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ○ <u>入学にあたっては、面談や体験入学を経て、正式に申請するようなプロセスをしっかりとすることで、児童生徒、保護者の不安を和らげ安心した入学へつながりやすい</u>と考えられる。 ○ <u>面談時に学校のコンセプト等を明確にすることで、入学後のミスマッチを防いだし、校内や隣接した場所に教育支援センターを併設することで、教育支援センターに通所しながらスムーズな体験入学を実施している例もある。</u> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ○ <u>特別な教育課程は、当該学校に通う児童生徒の社会的自立に向けて、その実態や地域性等、様々な状況を鑑みて検討する必要がある。</u> ○ 首都圏や主要都市のような都会の学びの多様な学校とは異なる自然豊かな本県の特徴を生かし、教科学習に捉われず、<u>社会性やソーシャルスキルを磨いたり、児童生徒の興味関心を生かしたり体験活動を取り入れた教育課程が望ましい</u>と考えられる。 ○ 山林での林業体験や海でのマリンスポーツ活動、農業体験を地域の企業や団体と連携して児童生徒の社会参加を支援していくことも考えられる。 ○ 子ども食堂と連携した放課後のレクリエーションでコミュニケーション力を身に着ける取り組みや地域の高校生との交流を通して、将来を見つめる時間にするなど地域の力を活かした取り組みを考えていくことも大切。 ○ <u>福祉機関との連携等で、ボランティアの参加や高齢者との関わりを通して児童生徒が役割を感じ自信につながっていくような取り組みも、社会的自立へつながる。</u> ○ 高等学校等の進路先との接続を見据えたうえで、児童生徒に対して進路保障やキャリア教育等のカリキュラムの設定が必要。その際、児童生徒が、周りの人に相談しながら自ら選択できる環境が必要。高校進学を視野に入れたコースや個の学習状況に応じた学習ができるコースを選べるようにする等、児童生徒の多様なニーズに応えられる教育課程を編成することが大切。 ○ <u>どのような学校だったら行きたくなるのか、子どもたちはどのような学校を求めているのか、子どもの声を聞くことが必要。</u> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>R6年9月1日～10月31日：誰もが学びやすく居心地のいい学校づくりに向けたアンケートの実施</p> </div> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ○ <u>様々な背景を持った児童生徒が対象であることから、専門職種（養護教諭・SC・SSW等）を配置し、適切な心理的支援等を実施するとともに、その場その場の経過の適切なアセスメントをしていくことが望ましい。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ○学力保障を行いつつ、社会性を身につけるなど、学校のビジョンを明確化すること。 ○安心して入学できるよう面談や体験入学、教育支援センターとの連携など丁寧に行っていくこと。 ○当該学校に通う児童生徒の社会的自立に向けて特色ある教育課程を編成すること。 ○専門職種を配置するなど、適切な心理的支援を実施すること。